

## 保育者の長期的なアイデンティティの変化と 自伝的記憶との関係

西山 修 ・ 若田 美香\* ・ 田中 修敬\*\*

This study stands on long-term longitudinal research of 12 years from the training stage to the initial and middle terms. The study traced the changes in childcare worker identities and clarified the relationship between long-term changes in childcare worker identities and autobiographical memories. To be more specific, the study continuously applied the Multidimensional Ego Identity Scale (Tani, 2001a) to the training school graduation period, the initial term, and the transition from initial form to mid-career. Also, the study looked back on the past from the mid-career period. The childcare worker was subsequently asked for descriptions of childcare episodes as autobiographical memories. As a result, it turned out that there were four patterns of changes in the identities of childcare workers: “descending group,” “ascending group,” “low sustaining group,” and “high sustaining group.” These change patterns appeared to match the descriptions of the corresponding autobiographical memories. The study sorted out each group using extracted keywords and the like.

Keywords : Childcare worker, Identity, Autobiographical memory, Long-term longitudinal research

### 問 題

保育職は、現代社会の就業構造の変化、家族形態の多様化などを背景に、子どものみならず家庭への支援者として、その社会的役割が拡大している。教育・福祉領域にあって、高い専門性と適性を身に付けることが求められる職種でもある。他方、養成、初任、中堅にあたる期間は、成人形成期 (Emerging Adulthood) と重なり、アイデンティティ探求の時期に当たる (Arnett, 2014)。アイデンティティ (ego identity; 以下、原則として自我同一性と記す) は、Erikson (1950; 1959) によって提示された概念であり、「真の自分であること」「正真正銘の自分」「自己の存在証明」などと換言することができる。谷 (2004) によれば、それは、「自分が自分であるとい

う一貫性を持ち、過去・現在・未来にわたって時間的連続性をもっているという個別的で主観的な自分自身が、周囲の人々からみられている自分自身や社会的関係のなかでの自分自身に合致しているという自信や安定感を意味している」と要説されている。

中間ら (2015) は、自我同一性の研究が展開される中で起こったこととして、自我同一性の発達の枠組みに関する見解の変化を挙げるができることと指摘している。すなわち、もともと自我同一性の発達は、自分がコミットできる場所を模索し、最適なものを選択し、同一性の達成に至る過程と考えられてきた。しかし実際には、達成後に再び、自我同一性の探求が展開されること等から (e. g., Stephen, Fraser, & Marcia, 1992), 個人が多様な選択肢につ

岡山大学大学院教育学研究科 発達支援学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

\*真庭市立北房こども園 716-1433 真庭市下砦部289

\*\*就実大学教育学部 703-8516 岡山市中区西川原1-6-1

The Relationship between Long-Term Changes in Identities and Autobiographical Memories among Childcare Workers

Osamu NISHIYAMA, Mika WAKADA\*, and Osanori TANAKA\*\*

Division of Developmental Studies and Support, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushimanaka, Kita-ku, Okayama 700-8530

\*Maniwa City Hokubo Centers for Early Childhood Education and Care, 289 Shimoazae, Maniwa 716-1433

\*\*Faculty of Education, Shujitsu University, 1-6-1 Nishigawara, Naka-ku, Okayama 703-8516

いて考え選択に至る過程のみならず、その選択を実践的に試みながら、さらに探求する過程も含め、自我同一性の発達過程を捉えるべきと考えられるようになっていく。

自我同一性の獲得は、青年期に誰もが達成するものとは捉えられていない。塚原 (2013) は、自我同一性の主題は青年期に顕著に表れるものであるが、現実的には成人期が実際の達成期間に相当すると述べている。また大野 (2010) は、自我同一性そのものが自他共に認める自信であるとする、そうした自信を身に付けることができるのは、社会に出てからであるとする。自我同一性は、青年期のみならず中年期以降をも射程とした生涯発達の観点から重要視されている。従って、自我同一性の有り様を一時点のみで捉えるのではなく、長期的な過程から検討することが求められていると言える。保育者としての成長過程も、このような自我同一性の確立過程と関連付けて捉える必要がある。

保育者を目指して就職したにもかかわらず、自らの適性に自信が持てず、保育職を辞する者は少なくない。上司や保護者との人間関係に苦心するケースもある。教師・保育者の成長過程に関する先行研究 (e. g., 高濱, 2001) からは、総じて初任期の困難さが指摘されている。家庭からの巣立ちとともに、育てられる者から育てる者へと変容することが求められる保育職は、この点で自我同一性を強く反映する職種の一つと言える。また、子どもや保護者、同僚との人間関係の中で、個人の自我同一性はその成長に応じた揺らぎを経験したり、再構築されたりする (足立・柴崎, 2010)。保育者の専門性とは何か、保育者養成に求められるものは何かという議論において、保育者の自我同一性の重要性が従来から指摘されてきたが (e. g., 森上, 2000)、保育者の社会的役割や責任が拡大する中で保育を実践していくためには、その根底を成す保育者自身の自我の成熟度が大きく影響すると考えられる。

本論では、自我同一性と自伝的記憶 (autobiographical memory) との関係に注目する。自伝的記憶について、佐藤・越智・下島 (2008) は、「過去の自己に関わる記憶の総体」と定義している。また、佐々木・皆川 (2013) は、自伝的記憶は、自分が経験した出来事に関する記憶のうちで、その記憶が残ることによって後の想起につながり、長期的に影響するとしている。自伝的記憶は自己を構成する要素であり、その集合体が個人の自我同一性を形成すると言える (e. g., Cohen, 1996; Conway, Singer, & Tagini, 2004)。

Bluck (2003) によれば、この自伝的記憶には、自己 (自己の一貫性や自己評価を支える)、社会 (対

人コミュニケーションに寄与する)、及び方向付け (行動や態度決定を支え、動機付ける) という3つの機能がある。保育者は、自分が行った保育中の対応や出来事を省察し、望ましい自己像を描きながら次の保育に活かすことであろう。また、保育は、子どもや保護者、同僚等、多くの対人的関係の中で営まれるものであると言える。さらに、保育の中で得た経験は、次の保育を行う際の判断の基準になり、次への方向付けとなることであろう。保育者は、実践の中で経験した出来事を具に記憶し、経験知として次の実践に繋げていると言える。また時に、自らの辛い経験を想起することで成長している自己を確認したり、様々な経験の記憶が望ましい自己像 (保育者像) を維持したりすると考えられる。

保育者が自らの保育経験において、何を記憶し、どう活かしてきたかは、保育の質と保育者としてのその後の成長に影響すると考えられる (吉田・西山, 2017)。本論では後に詳述するように、中堅期に至った時点で過去を振り返り、自伝的記憶として自らの自我同一性が揺らいだ経験をエピソードとして挙げるよう求める。中堅保育者は一般に、経験も体力も充実しており、園運営の中心的な原動力となっている。他方、保育現場の要として周囲からの期待も大きく、時としてそれが負担感やストレスにも繋がる。結婚、出産、子育ての時期と重なる場合も多く、個人の生活は充実するとともに多忙を極める。このような中堅期に至り、今までと異なる状況に置かれる中で過去を振り返ったとき、どのような保育エピソードが自伝的記憶として挙げられるのか検討したい。

以上を踏まえ、本論の目的を整理すると次のようになる。まず、保育者の自我同一性について経時的な変化パターンを検討する。具体的には、養成から初任期、中堅期に至る長期縦断的調査による量化されたデータから、クラスタ分析により保育者の自我同一性の主要な変化パターンを同定することを第1の目的とする。加えて、自我同一性の変化パターンと自伝的記憶との関係を取り上げる。具体的には、各変化パターンにおける自伝的記憶の記述に基づき、質的な視点で検討することを試みる。これにより自我同一性の変化パターンと自伝的記憶としての保育エピソードとの関係を明示することを第2の目的とする。これらにより、保育者支援のための新しい知見を得ることを目指す。

## 方 法

### 調査対象及び時期

第1回 (卒業期) 調査は、関東、中国地方の短期

大学4校において、卒業直前の1月末から2月にかけて実施した。調査は各大学の教員に依頼し、講義後などに無記名集団式で行った。また、調査の趣旨を説明し、卒業後も継続実施される旨を伝え、了解を得た者には卒業後の連絡先の記入を求めた。第2回(初任期)、第3回(初任から中堅への移行期。以下、移行期)、第4回(中堅期)調査は、同じ養成校卒業生に、郵送法による質問紙調査を実施した。初任期は卒業から1年後、移行期は8年後、中堅期は12年後に当たる。調査対象者には毎回、文面にて調査の趣旨を説明し、了解を得た者から回答を得た。4回全てに回答があり、保育者養成校を卒業後に保育職を経験している者を対象とした<sup>1)</sup>。また、全調査対象者の内、社会人入学者等の年長者(卒業期に30歳以上)、学籍番号の記入忘れ等によりデータの結合ができなかった者は除いた。その結果、138名(卒業直後の所属等:公立幼10名、公立保18名、私立幼38名、私立保64名、進学3名、その他5名。性別:男性2名、女性136名。卒業期の平均年齢19.84歳、標準偏差.66、中堅期の平均年齢32.40歳、標準偏差.65)が対象となった<sup>2)</sup>。データ収集のため、3養成校(最終年度は4養成校)に依頼し、年次をずらしながら各回3年間かけて実施している。よって調査時期は2004年1月から2018年5月であった。

#### 調査内容及び手続

保育者の自我同一性の変化を捉えるため、谷(2001a)が開発した多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; 以下、MEIS)を用いた。同一性の感覚を測定するこの尺度は、信頼性・妥当性共に高く、有用性の高い尺度と確認されている。本尺度は次の4つの下位尺度から構成される。すなわち、自己斉一性・連続性(自己の不変性及び時間的連続性についての感覚)、対他的同一性(他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚)、対自的同一性(自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚)、及び心理社会的同一性(現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚)である。各5項目、計20項目から成る。本論では、同一性地位の分類ではなく、量的に程度を検討することから特性論に立つ本尺度を援用した。自我同一性の変化パターンの同定には20項目の総得点を用い、自伝的記憶を含めた考察の視点として下位尺度の4つの視点を用いる。回答は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらかというにあてはまる」「ど

ちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「全くあてはまらない」の7段階評定(7~1点)で得点化した(反転項目はこの反対で得点化)。

保育者の自我同一性に関わる自伝的記憶として「これまでの保育の中でもっとも記憶に残っているご自分のアイデンティティが揺らいだ経験を1つ挙げ、次の①~④などを含め出来るだけ詳しく教えてください」と尋ね、保育エピソードの記述を求めた。具体的には、①その時の状況や様子、②その時あなたが感じたこと、③その後、この経験が保育に活かされたこと、及び④今振り返ってその時のことをどう思うか、とした。これらにより自伝的記憶を想起する手立てとした。また、この経験は何歳頃で、保育者になって何年目の頃かを尋ね、記入を求めた。さらに、この経験が、あなたのアイデンティティにどの程度、影響を与えたか、0~100の数値で影響度の記入も求めた。なお、質問紙には、「保育に関するどんな経験でも構いません。アイデンティティとは「自己の存在証明」「自分らしさ」などと訳されます」と簡単な説明を付した。

回答は無記名とし、個人の属性に関する質問として「現在の職業・所属」「担当年齢」「性別」「年齢」「保育経験年数」等の記入を求めた。ただし整理のため、学籍番号の記入は求めている。質問紙には本論では用いない、保育者効力感を問う項目等が含まれた。調査対象者にはデータは全て統計的に処理し、個人を特定することはないことを伝え、同意を得た上で調査を実施した。調査実施に関わる配慮等は日本発達心理学会(2000)の倫理基準に準じた。また、第4回調査の実施にあたり改めて岡山大学大学院教育学研究科研究倫理委員会の審査を受け承認を得ている(課題番号16、2018年1月31日承認)。

#### 結果と考察

##### 各時期の保育者の自我同一性の様相

Table 1には、保育者の自我同一性の様相を確認するため、時期別にMEIS得点の平均値及び標準偏差を示した。参考に4つの下位尺度得点の平均値と標準偏差も併記した。先ず、時期(卒業期、初任期、移行期、中堅期)を要因として、MEIS得点を従属変数とした1要因分散分析を行った<sup>3)</sup>。分析の結果、統計的に有意な主効果が認められた( $F_{(2,81,384,71)}=10.61, p<.01$ )。Bonferroni法による多重比較の結果<sup>4)</sup>(以下全て、多重比較はBonferroni法)、卒業期と初任期に比べ、移行期と中堅期のMEIS得点が高かった。

次に、4つの下位尺度と時期を要因として、下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行っ

Table 1 各時期におけるMEIS得点の平均値及び標準偏差 N=138

	卒業期	初任期	移行期	中堅期
MEIS (谷, 2001a)	89.61 (18.29)	89.04 (21.03)	95.99 (21.04)	95.04 (20.11)
自己斉一性・連続性	23.95 ( 6.25)	23.47 ( 6.43)	25.41 ( 6.35)	25.11 ( 6.33)
対自的同一性	22.58 ( 6.18)	22.16 ( 6.50)	24.24 ( 5.98)	23.75 ( 5.76)
対他的同一性	21.33 ( 5.44)	21.24 ( 6.31)	22.70 ( 6.37)	22.48 ( 5.94)
心理社会的同一性	21.75 ( 4.71)	22.17 ( 5.38)	23.65 ( 5.23)	23.70 ( 5.17)

註：( ) 内の数値は標準偏差。

た。その結果、下位尺度と時期の主効果が有意であった ( $F_{(2.27,311.08)}=22.00, p<.01$ ;  $F_{(2.81,384.71)}=10.61, p<.01$ )。交互作用は有意ではなかった ( $F_{(7.37,1009.32)}=.82, n.s.$ )。多重比較の結果、対他的同一性に比べ、対自的同一性と心理社会的同一性が高く、それらに比べ自己斉一性・連続性が高いことが示された。また時期は、卒業期と初任期に比べ、移行期と中堅期が高いことが示された。他者からみられているであろう自分が、本来の自分と一致しているという感覚である対他的同一性が低く、自己の不変性及び時間的連続性の感覚である自己斉一性・連続性が高い点は、大学生を対象とした谷 (2001a) でも同じ傾向がみられる。一方、時期については、MEIS得点全体と同様の結果が得られた。

今回の調査対象者は、保育職を経験している者としている。従って、保育職を退いたり、転職したりしている者も含まれる。そのような調査対象者でありながら、成人形成期 (Arnett, 2014) を通じてMEIS得点は全体としては高くなってきている。ただし各時期におけるMEIS得点の標準偏差は比較的大きいことから、保育者の自我同一性には12年間に渡る多様な変化パターンが存在することが予想さ

れる。そこで以下では、各時期のMEIS得点に基づいて自我同一性の変化パターンの同定を試みる。

#### 保育者の自我同一性の変化パターン

卒業期、初任期、移行期、中堅期のMEIS得点に基づいて、平方ユークリッド距離を用いたWard法によるクラスタ分析を行った。Ward法は、クラスタ同士が併合する際に生じる、情報量の損失が最小となるよう併合する方法である (西川, 2006)。分析の結果、明確な4つのクラスタに分類できることが示された。Fig.1には、クラスタ分析の結果を樹形図で示した。

変化パターンの特徴を確認するために、統計量の比較を行った。Table 2には、クラスタ別、時期別にみたMEIS得点の平均値及び標準偏差を示した (後述する群名も記載)。各クラスタと時期を要因として、MIES得点を従属変数とした混合計画による2要因分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった ( $F_{(8.31,371.21)}=11.66, p<.01$ )。プールした誤差項を使用しない方法により (以下、全て同じ) クラスタの単純主効果を検定したところ、卒業期、初任期、移行期、中堅期の全て有意であった (順に、

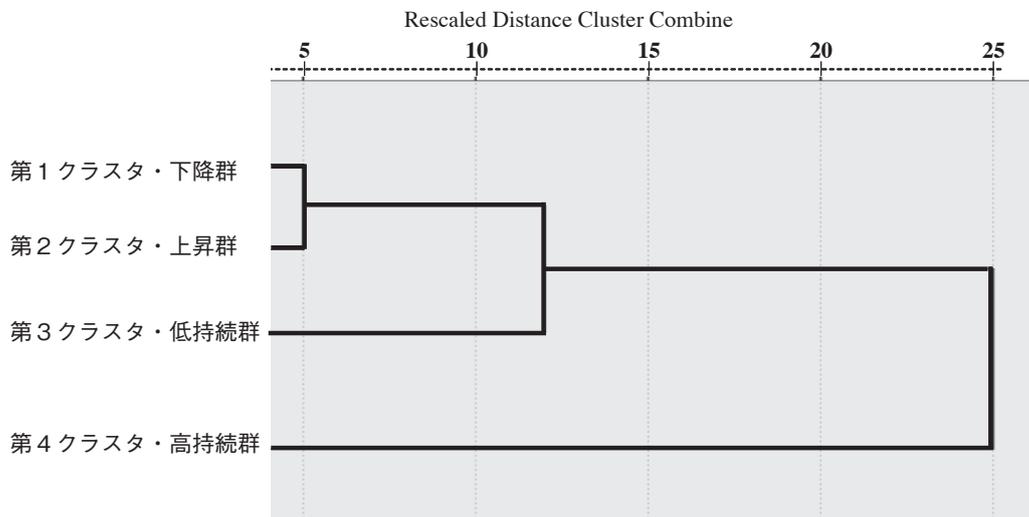


Fig.1 MEIS得点に基づく保育者の樹形図 (Ward法)

Table 2 各クラスタ（群）におけるMEIS得点の平均値及び標準偏差 N=138

	n	卒業期	初任期	移行期	中堅期
第1クラスタ・下降群	37	93.73 (13.19)	88.32 (12.37)	91.76 (12.50)	82.22 ( 8.57)
第2クラスタ・上昇群	29	86.48 (10.30)	86.72 (10.68)	108.21 (11.99)	105.72 (11.59)
第3クラスタ・低持続群	38	71.74 (13.10)	68.03 (12.29)	74.95 (17.15)	81.08 (18.57)
第4クラスタ・高持続群	34	107.76 (13.45)	115.26 (13.42)	113.71 (15.21)	115.50 (12.57)

$F_{(3,134)}=50.26, 89.04, 51.53, 56.86$  いずれも  $p<.05$ 。多重比較の結果、卒業期及び初任期では、第3クラスタに比べ第1クラスタと第2クラスタが有意に高く、さらに第4クラスタが有意に高かった。移行期では、第3クラスタに比べ第1クラスタが有意に高く、さらに第2クラスタと第4クラスタが高い。中堅期に至ると、第1クラスタと第3クラスタに比べ第2クラスタが有意に高く、さらに第4クラスタが高かった。

次に、時期の単純主効果を検定したところ、全てのクラスタで有意であった（順に、 $F_{(2,77,371,21)}=6.88, 29.45, 8.48, 3.25$  いずれも  $p<.05$ ）。多重比較の主な結果を挙げると、第1クラスタは、卒業期から中堅期、移行期から中堅期と有意に低くなっていた。第2クラスタでは、卒業期と初任期に比べ、移行期と中堅期が有意に高かった。一方、第3クラスタと第4クラスタでは、卒業期に比べ中堅期が有意に高いものの、総じて変化はみられなかった。これらの結果を踏まえ、各クラスタの特徴を挙げると次のようになる。

第1クラスタは、卒業期に中程度のMEIS得点を示すものの、卒業期から中堅期へと有意に下降している。中堅期の得点が低いばかりでなく、標準偏差も小さいことから、明らかな下降を示す群と言える。少なからず自我同一性の揺らぎを経験している群と考えられ、特に中堅の立場になった時期に支援の必要な群と考えられる。以上のことから、37名から成る第1クラスタを「下降群」と命名した。

第2クラスタは、第1クラスタと相対する位置付けと言える。卒業期から初任期、移行期から中堅期に変化は見られず、初任期から移行期にMEIS得点が大きく上昇している。移行の中にあつて自我同一性の獲得に向かっている群と考えられ、移行期への支援について何らかの手掛かりを持つ群と考えられる。以上のことから、29名から成る第2クラスタを「上昇群」と命名した。

第3クラスタは、卒業期から中堅期を通じて、常にMEIS得点が最も低い群である。中堅期に至っても相当数の保育者は自我同一性の達成には至っていないことが確認できる。卒業期から自我同一性に関わる課題を持ち、その解決がないまま推移している

群と言える。そこで、38名から成る第3クラスタを「低持続群」と命名した。ただしこの群は、移行期及び中堅期の標準偏差が比較的大きいことから、成人形成期の後半の多様なパターンを内包している可能性がある。

第4クラスタは、第3クラスタと相対する。卒業期から中堅期を通じて、常にMEIS得点が最も高い群である。自我同一性が高い水準で維持されたまま推移している群と言える。就職直後の環境変化や、初任期から中堅期への移行の中にあつても、自我同一性が維持されている。そこで、34名から成る第4クラスタを「高持続群」と命名した。

#### 自我同一性の変化パターンと自伝的記憶

本論の目的の1つは、量化されたデータによるクラスタ分析から自我同一性の変化パターンを同定した上で、その変化パターンと自伝的記憶としての保育エピソードとの関係を明示することである。そこでまず、群ごとの保育エピソードの全体的傾向を検討するため、全記述データを対象にテキストマイニングソフト・KHCoder (Ver.3. Beta.01) を用いて分析した。これにより質的データに数値化操作を加えることで、恣意的になりがちな作業を避け、量的な検討が可能となる(樋口, 2013)。まず、全記述データをChaSen (松本, 2000) により分かち書きし、17,570語を抽出した。抽出語の種類は1,959語であった。その中から1,595語が分析に用いられた。分析に用いた品詞は、KHCoderの品詞体系に従った。また、一部の語を分けずに分析するため、強制抽出の処理を行った(例えば「人間関係」「保護者」)。さらに、「思う」など群間の違いが生じない一般的な動詞等は除外した。Table 3には、各群を特徴付ける語とJaccardの類似性測度を示した。頻出語や各群に特徴的な語は、どのような文脈で使用されているかコンコーダンス分析により逐一確認し、考察の参考とした。なお、自伝的記憶としての保育エピソードの記述がなく、「特に思いつきません」などの回答もあった。各群における記入者・未記入者の比率を $\chi^2$ 検定により確認した結果、有意ではなく( $\chi^2_{(3)}=2.87, n.s.$ )、群間に違いはないと判断された。Table 4には、各群における具体的な保育エピソード

Table 3 各群を特徴付ける語と Jaccard の類似性測度 N=138

	1 下降群	2 上昇群	3 低持続群	4 高持続群
保護者	.093	今	.073	子ども
良い	.081	毎日	.045	保育
感じる	.069	先輩	.044	先生
伝える	.062	楽しい	.037	保護者
担任	.062	気持ち	.037	クラス
今	.061	出来る	.034	今
食べる	.050	不安	.034	対応
大切	.043	泣く	.033	園
時間	.041	気	.033	感じる
発表	.040	年目	.033	伝える

Table 4 各群の保育エピソードの記述例

【第1クラス・下降群】

ある日、給食中に何度も横や後ろを向きながら食べる子どもに注意をしたら、次の日の連絡帳に、「そういったしつけは家でやるので、子どもに言わず、私に言ってください」と記入された。「目の前で起きていることに対して注意はするが、お母様にもお伝えするようにします」というようなお返事を書いた。その後も注意すると「先生のことが怖くておびえている」と言われたり、「発表会の歌が難しすぎる」など言われたりした。知らぬ間に保育中、直接園長に話に来て、「子どもの前で土下座させてほしい」と言ったり、発表会の本番では、私に対して、「失敗すればいいのに」と言ったりすることもあった。その後も細かいことをいろいろ言われ、和解することはなかった。最初は私の言い方が悪かったのかな…といろいろ考えたが、発表会の件や細かい理不尽なことを言われ続けたため、逆に頭にきた。このことがあったせいか、ある程度のクレームは上手くかわせるようになったかもしれないが、今思い出しても腹立たしいです。(私立幼稚園、就職後9年目、28歳のとき)

【第2クラス・上昇群】

初めての5歳児クラス。男の子4人が中心となり、クラス運営を乱していました。保育士の話の話を全く聞かず、部屋にジッとしていれない4人組。毎日が「つらい、つらい…」と朝が来るのが怖くなりました。初めての経験にどうしたら良いのか分かりませんでした。とりあえず、がむしゃらに毎日をこなし、1日1回以上抱きしめる時間を作り、1人1人に向き合いました。でも何が正解で失敗なのか分かりません。たくさん研修にも行き、出来ることは試しました。1年が経とうとしている頃、成長して落ち着ける4人になっていました。そして3月末の朝の会で私が1人の時に一番大変だった子どもが「先生は、僕達のこと怒ってくれるけど、それは僕達が大好きだから怒ってくれるんだよね。」と書いてくれました。そして他の子どもも「そうさそうさ。先生は俺達のこと大好きだもんね。」と。涙が止まりませんでした。毎日本当につらくて大変だったけど、頑張ったことを分かってくれたと嬉しくなりました。それから、どんな子どもでも1人1人に向き合い、愛情をたくさん持って関わることを大切に保育をしています。(私立保育所、就職後4年目、24歳のとき)

【第3クラス・低持続群】

本当に最近のことなのですが、指針が変わることを前提として、リーダー制が前年度から始まり、改めて自分が中堅であることを自覚しました。今は乳児保育のリーダーをさせてもらっているのですが、若い子達といろいろアイデアを出しながら保育していく中で、自分の中での責任と、上に立つ自分を含むリーダーの立ち位置、そこにズレが生じてしまい、前年度は4人の若い子達が園を離れていきました。今の保育園は自由で、好きな保育ができるのですが、先輩・後輩のはっきりしたものがなく、尊敬できる保育というものが明確ではない..そこで上に不満を持つ下、下の悩みを聞いてあげない上。間の立場にいる自分は、何かしようとしましたが..できませんでした。今年度からはじまり、はっきりと心に穴があいたような、責任を感じて疲れきってしまったのか、人と接することが恐くなりました..。失ったものも多いですが、とりあえずはこの一年頑張ってみようかと思えます。信じることで不安になることも多いですが、信じてみようと思えます。(公立幼稚園、就職後10年目、30歳のとき)

【第4クラス・高持続群】

園を異動になって、園の雰囲気や保護者の方々などへの対応が、自分が思い描いていたものと全く違っていった。3つ目の園だったので、自分にとっては2回目の異動。1度経験があったので大丈夫だろうと思っていったが、前園とのギャップや思っていた雰囲気よりも冷たくて、子どもがかわいそうに感じてしまつてつらかった。自分だけがそう思っているのかと思ひ、周りに味方がいないと思つていったが、信頼できる先生に相談し、自分だけは周りの先生たちに流されないで楽しんで保育しようと決めた。その決意や思いを持って保育することで、子どもにとっての居場所となるようなクラスをつくろうと思つて保育した。どこに行っても、自分は自分の大事にしてきていることを忘れず、流されてしまつてはいけない。自分にはずかしい生き方になってしまうと思つた。いつも、自分の保育や、子どもへの関わり方を見つめ直すことや、それを続けていくことで自分と同じ考えの人がみつかっていき、点が線になっていくと分かつたし、相談にのってくださった先生のことを改めて尊敬した。(公立保育所、就職後13年目、32歳のとき)

註： 記述例は内容を変えない範囲で一部省略し記載している。

ドの記述例を示した。

加えて、現在の保育の充実度、これからの遂行への自信度、記述された保育エピソードが自分のアイデンティティに与えた影響度について、群を要因とした1要因分散分析を行い、群間の違いを確認した。その結果、「現在の保育の充実度」「これからの遂行への自信度」に統計的に有意な主効果が認められた( $F_{(3,77)}=4.15, 9.55, p<.01$ )。多重比較の結果、現在の保育の充実度は、下降群に比べ高持続群が有意に高かった。これからの遂行への自信度は、下降群に比べ高持続群が高く、また低持続群に比べ上昇群と高持続群が高かった。影響度は有意ではなかった( $F_{(3,77)}=.52, n.s.$ )。また、記述された保育エピソードがあった年齢、及びそれは保育経験の何年目かについて、群を要因とした1要因分散分析も行ったが、有意ではなかった( $F_{(3,77)}=.87, .98, 共にn.s.$ )。以下、これらの結果を総合して、各群の自伝的記憶の特徴を整理する。

第1クラスター・下降群は、「保護者」「良い」「感じる」などを特徴語として挙げるができる。コンコダンス分析からは、保護者の目を気にしながら、担任として職責を果たそうとする姿がうかがえる。「発表」には、発表会が多く含まれ、他者からみられる自分への意識が反映されていると言える。また、「時間」への意識が強く、「時間内に完食できるように」「時間がかかって」などの記述にも特徴がみられる。本群は、卒業期に中程度のMEIS得点を示すものの、卒業期から初任期、移行期から中堅期と有意に下降している。この群に含まれる現職の中堅保育者は、現在の保育の充実度、これからの遂行への自信度ともに低い。成人形成期を通じて自我同一性の探求がなされるが(Arnett, 2014)、その揺らぎを経験しながら達成には向かっていない群と考えられる。とりわけ、他者からみられている自分への意識が強い中で、保育者としての自分を自己定義することが難しく、保育に対して低い自己投入しかできていない群と考えられる。

第2クラスター・上昇群は、第1クラスターと相対する位置付けと言える。「今」「毎日」「年目」など、経験を時間軸に位置付け、継続的な頑張りを振り返る記述や、「楽しい」「気持ち」「不安」「泣く」など感情に関わる経験に関する記述が多くみられた(なお「泣く」については子どもの泣きに関わる保育経験の記述が殆どである)。全体的に感情喚起度が高いエピソードが挙げられている傾向がある。特徴語の1つ「先輩」のコンコダンス分析からは、「そんな先輩に自分もならねば」「先輩から注意をしてもらい」など、先輩保育者を肯定的な存在と捉えて

いることがうかがえる。また、「出来る」の特徴語からは、子どもの成長や自分の変化に、意識的に目を向ける傾向がみられる。上村(2012)は、中堅保育者について、経験者として期待される一方で、熟練保育者との保育観の違いや、新人保育者の指導等に苦慮する中間層としての負担を指摘している。これに対して、本群は初任期から移行期にMEIS得点が大きく上昇している。移行の中にあつて自我同一性の達成に向かっていている群と考えられる。総じて、肯定的にこれまでの経験を捉え、重要な自伝的記憶として位置付けていることが、これからの遂行への自信度の高さに繋がっている可能性がある。

第3クラスター・低持続群は、卒業期から中堅期を通じて、常にMEIS得点が最も低い群である。「子ども」「先生」「保護者」など保育の対象や同僚に関わる語や、「クラス」「園」など集団や組織を意識した語が上位に挙がっている。とりわけ、「対応」「伝える」など保護者や園長とのやり取りに関わる記述に特徴がみられる。いずれも、起こった出来事に対して行動したり、対処したりすることに意識が向いており、受け身的な印象を持つ保育エピソードが多い。本群に含まれる現職の中堅保育者は、これからの遂行への自信度が最も低い。中堅期に至っても、これからの保育に自負が持てない状況がうかがえる。卒業期から自我同一性に関わる課題を持ち続けており、その解決がないまま中堅期に至っている群と言える。

第4クラスター・高持続群は、第3クラスターと相対する。「子ども」「先生」など保育の対象や同僚に関わる語に加え、「自分」が上位に挙がっている点は注目し得る。「信頼できる先生に相談し、自分だけは流されないで楽しんで保育しようと思った」「自分らしく振る舞えるきっかけになった」「自分が壁に当たったとき、自分と誠実に向き合せて良かった」など、周囲との関係の中で確かな自分を意識した記述が多い。また、「今何が必要か考えることが大切」「目指す方向が分からなくなった」など、「経験」「考える」「分かる」といった経験と思考過程の記述も特徴的と言える。全体として、周囲と自分に目が向いており、現実的な対象を意識しつつ、それぞれの保育の課題に向かっている様子がうかがえる。また、「それからの保育への自信につながり」「ひとまわり成長できたように思える」などの記述のように、保育職への自信ややりがいを感じており、概して肯定的な捉え方がみられる。本群は、卒業期から中堅期を通じて、常にMEIS得点が最も高い群である。現在の保育の充実度、これからの遂行への自信度ともに、最も高い。就職直後の環境変化や、初任から中

堅への移行の中にあっても、自我同一性が維持されており、最も自我の安定した群と言える。

以上、保育者の自我同一性の変化パターンと自伝的記憶との間に明らかな関係が示された。すなわち、長期的な自我同一性の変化パターンの違いによって、自伝的記憶としての保育エピソードの記述内容には相当な違いが存在することが示唆された。清水(2011)は、個人が自己の同一性や連続性を保つために、自伝的記憶は1つの本質的な役割を果たすとしているが、保育者を対象とした本論の結果からもその可能性が示唆されたと言える。また、こうした自伝的記憶としての保育エピソードの相違は、役割や責任が一層増す成人期後期に向けた、保育者としてのその後の成長にも影響を及ぼすものと推察される。

### 総括と今後の課題

本論ではまず、保育者の自我同一性について経時的な変化パターンを検討した。具体的には、養成から初任期、中堅期に至る12年間の長期縦断的データから、クラスタ分析により保育者の自我同一性の主要な変化パターンを同定した。その結果、「下降群」「上昇群」「低持続群」「高持続群」の特徴的な4群を抽出することができた。次に、これらの自我同一性の変化パターンと自伝的記憶との関係を検討した。具体的には、各群における自伝的記憶の記述に基づき検討を試みた。その結果、上昇群や高持続群では総じて、これまでの経験を肯定的に捉え、重要な自伝的記憶に支えられて今の自分があると位置付けられており、そのことが将来に向けた遂行への自信度の高さにも繋がっている可能性が示唆された。これに対して、下降群や低持続群では、自伝的記憶の記述として、保護者など周囲からの目に意識が向く傾向などが示され、否定的な意味付けが散見された。このように、自我同一性の変化パターンと自伝的記憶との間に明らかな対応関係が示されたと言える。保育職に焦点化し、長期縦断的なデータから自我同一性の変化の多様性を明示した研究は従来ない。また、保育者の自我同一性と保育エピソードとの関係が明示されたことから、今後、具体的支援を考える上での手掛かりを得たと言える。

次のような点は本論の限界であり、今後の課題と考えられる。第1に、両者の影響関係の解明である。Wilson & Ross (2003)は、自伝的記憶と自我同一性は双方向に影響を及ぼし合っているとしている。個人の自我同一性は自伝的記憶によって形成され、維持されると考えられるが、逆に、自我同一性の様相によって自伝的記憶が影響を受けることも考えら

れる。本論では、保育者を対象に、長期的な自我同一性の変化を検討した上で、自伝的記憶との確かな対応関係を確認した。保育者の自我同一性の形成と自伝的記憶との双方向の影響が示唆されたと言える。しかしながら、因果関係を含む影響の仕組みは不明である。どのように双方が影響し合うのか、保育者への面接等を通じた、より丁寧な質的検討等により補完していくことが望まれる。

第2に、介入可能性の検討である。山本(2015)は、大学生を対象に、重要な自伝的記憶の想起が自我同一性の達成度に影響するのか検討している。その結果、重要度の低い自伝的記憶の想起を求めた群に比べ、重要度の高い自伝的記憶の想起を求めた群の自我同一性の尺度得点が高くなったと報告している。重要度の高い自伝的記憶は鮮明であり、感情喚起度が高くかつ快であり、想起頻度が多く、自我同一性を形成する中心的な役割を果たしている可能性が示唆されたとしている。本論では、保育者の自我同一性の変化パターンと自伝的記憶としての保育エピソードの特徴に強い関連が見出された。ただし、自伝的記憶の不安定さの指摘(e.g., 谷, 2001b)のように、この結果はあくまでも中堅期のある時点における自我同一性の変化パターンと自伝的記憶との関連が示されたという点には留意が必要である。一方、不安定であるがゆえに、意図的に、保育エピソードの捉え方や意味付けの変容を促したり、感情喚起に介入したりすることで自伝的記憶の再体制化を図り、保育者の自我同一性の形成に何らかの影響を与える可能性も考えられる。その際、保育について語ることは、保育者にとって日常的であり、特段の準備がなくとも、手軽にどこでも始めることができるという利点がある。自我同一性の形成は、保育者が生き生きと保育実践を継続していく基盤になると考えられるが、自らの保育エピソードを捉え直し語り合うグループワーク等を通して自我同一性の形成を促す、支援プログラムの開発等が考えられる。

### 註

- 1) 本論では、保育者支援に資する知見を得るため、中途での転退職者も含め、「保育者」として分析対象とした。また、分かり易さのため、時期を表す語として「初任期」「移行期」「中堅期」を採用している。
- 2) データの一部は、養成期を検討した一連の研究群(西山, 2009; 西山, 2013; 西山・片山・岡山, 2012; 西山・田爪・富田, 2006; 西山・富田・田爪, 2007)と重なる。
- 3) 本論では、対応のあるデータは全て、Mauchly

の球面性検定の結果により, Greenhouse-Geisser の  $\epsilon$  による修正から F 値を算出し有意確率を判断している。

4) 以下, 多重比較の結果は, 煩雑さを避けるため有意であったところを中心に記載している。

#### 引用文献

- 足立里美・柴崎正行 (2010) 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点をあてて—, 保育学研究, 48(2), 213-224.
- Arnett, J. J. (2014) *Emerging adulthood: The winding road from the late teens through the twenties (2nd ed.)*. New York: Oxford University Press.
- Bluck, S. (2003) Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, 11(2), 113-123.
- Cohen, G. (1996) *Memory in the real world (2nd ed.)*. UK: Psychology Press.
- Conway, M. A., Singer, J. A., & Tagini, A. (2004) The self and autobiographical memory: Correspondence and coherence. *Social Cognition*, 22(5), 491-529.
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company. (仁科弥生訳 (1977) 幼児期と社会 1 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. (小此本啓吾訳編 (1973) 自我同一性 誠信書房)
- 樋口耕一 (2013) KH Coder2.x リファレンス・マニュアル <http://khc.sourceforge.net/diagram.html> (情報取得 2013/6/23)
- 松本裕治 (2000) 形態素解析システム「茶筌」, 情報処理, 41(11), 1208-1214.
- 森上史朗 (2000) 保育者の専門性・保育者の成長を問う, 発達, 83, 68-74.
- 中間玲子・杉村和美・畑野快・溝上慎一・都筑学 (2015) 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み, 心理学研究, 85(6), 549-559.
- 日本発達心理学会 (2000) 心理学・倫理ガイドブック—リサーチと臨床—有斐閣
- 西川浩昭 (2006) クラスタ分析 柳井晴夫・緒方裕光編著 SPSS による統計データ解析 現代数学社 Pp.230-245.
- 西山修 (2009) 保育者志望学生におけるアイデンティティの発達の变化, 応用教育心理学研究, 25(2), 23-30.
- 西山修 (2013) 保育者志望学生における保育職の適性感の変化, 応用教育心理学研究, 30(1), 3-11.
- 西山修・片山美香・岡山万里 (2012) 保育者養成校の学生における進級時のアイデンティティと職業認知の構造, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 151, 51-58.
- 西山修・田爪宏二・富田昌平 (2006) 家庭からの巣立ち期における保育者志望学生のアイデンティティと職業認知との関係, 家庭教育研究, 11, 1-10.
- 西山修・富田昌平・田爪宏二 (2007) 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造, 発達心理学研究, 18(3), 196-205.
- 大野久 (2010) アイデンティティ・親密性・世代性: 青年期から成人期へ 岡本祐子編 成人発達臨床ハンドブック ナカニシヤ出版 Pp.61-72.
- 佐々木智美・皆川直凡 (2013) 大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析—自伝的記憶としての感動体験—, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 10, 21-28.
- 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (2008) 自伝的記憶の心理学 北大路書房.
- 清水寛之 (2011) 自伝的記憶の発達 子安増生・白井利明編 発達科学ハンドブック: 3時間と人間 新陽社 Pp.274-292.
- Stephen, J., Fraser, E., & Marcia, J. E. (1992). Moratorium-achievement (Mama) cycles in lifespan identity development: Value orientations and reasoning system correlates. *Journal of Adolescence*, 15(3), 283-300.
- 高濱裕子 (2001) 保育者としての成長プロセス—幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達— 風間書房.
- 谷冬彦 (2001a) 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—, 教育心理学研究, 49(3), 265-273.
- 谷冬彦 (2001b) アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対する批判的検討 (I)—基本的問題—, 神戸大学発達科学部研究紀要, 9(1), 31-39.
- 谷冬彦 (2004) アイデンティティの定義 谷冬彦・宮下一博編著 さまよえる青少年の心—アイデンティティの病理 発達臨床心理学的考察— 北大路書房 Pp.2-4.
- 塚原拓馬 (2013) 成人期におけるキャリア発達に与える要因と支援の在り方—成人期のアイデンティティ危機と職業・家庭要因からの考察—, 実践女子大学生生活科学部紀要, 50, 99-110.
- 上村眞生 (2012) 保育士のメンタルヘルスに関する研究—保育士の経験年数に着目して—, 保育学研究, 50(1), 53-60.

Wilson, A.E., & Ross, M. (2003) The identity function of autobiographical memory: Time is on our side. *Memory*, 11(2), 137-149.

山本晃輔 (2015) 重要な自伝的記憶の想起がアイデンティティの達成度に及ぼす影響, *発達心理学研究*, 26(1), 70-77.

吉田満穂・西山修 (2017) 保育実践における気付き体験と保育者効力感との関係, *応用教育心理学研究*, 33(2), 3-13.

#### 付 記

田爪宏二先生 (京都教育大学), 富田昌平先生 (三重大学), 横山順一先生 (山口県立大学) には調査実施のお力添えを賜りました。また, 谷冬彦先生 (神戸大学大学院) には本論を含む一連の研究群への尺度使用を御了諾いただきました。厚く御礼申し上げます。なお本論は, 文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究(C) 課題番号: 15K04296) による助成を受けています。